子供どうし

小川未明

青空文庫

学校から帰りの二少年が、話しながら、あまり人の通らない往来を歩いてきました。

「清ちゃん、あのお庭に咲いている赤い花はなんだか知っている?」と、一人が、立ち止まって垣根の間からのぞこうとしたのでした。

「孝ちゃん、花じゃない、赤い葉鶏頭だよ。」

「ちょっと見ると、花みたいだね。」

「孝ちゃん、この門は古いんだね、ここについているのは、呼び鈴だろう。」

「呼び鈴だけど、きっときかないんだよ。」と、孝二がいいました。

「どうして? 押せば鳴るんだろう。」

「だって、線がついていないじゃないか。」と、孝二が、あたりを見まわしていました。

「押してみようか。」

「もし、人が出てきたら、どうするの。」

「逃げようよ。」

二少年はそんなことをいって、顔を見合って笑いました。

「孝ちゃん、お押しよ。」

「清ちゃん、お押しよ。」

「よし、押してみようか……。」と、清吉が、脊伸びをして、ボタンに指をつけようとすると、孝二は、はや逃げ腰になっていました。

「孝ちゃんずるいや、いっしょに逃げようよ。」

そういって、清吉は、白いボタンを押したのですけれど、なんのてごたえもありませんでした。

「だれもこないよ。」

「いまに、出てくるよ。」

「やはり、きかないのだ。」

そんなことをいっていると、玄関の戸が開く音がしました。二人の少年は、足音のしないように走って、すぐ傍らの畑に生えているすすきの蔭に隠れてしまいました。このあたりは、昔は畑地で、最近町になったのであって、まだところどころに空き地や、畑がありました。もう秋が近づいたので、すすきには白い花が咲いていました。

二人は、息をころして、耳であちらのようすをうかがっていると、門のところまできた足音が、しばらくそこに止まっていたが、また引き返していったようでした。二人は、また顔を見合って、にやりと笑いました。

「もうお家へ入ったね。」

「ごらんよ、あの呼び鈴は、きこえるのだから。」と、清吉が、いいました。

「おもしろいね、もう一度やってみようか。」と、孝二が、いいました。

「つかまったら、たいへんだ。」

「つかまるもんか。」と、孝二は、愉快そうでした。

「もうすこし待っておいでよ。」

二人の少年は、すすきの蔭から、顔を出して往来の方をながめていました。同じ組の岡田が、ぞうり袋をぶらさげながら、帰っていきました。

「孝ちゃん、岡田も呼ぼうか?」

「岡田は、足がおそいから、だめだよ。」

「つかまるといけないね。」

往来に通る人がないのを見とどけて、二人はまた古い門の柱へ近寄りました。こんどは、孝二がボタンを押したのです。すると、すぐに戸が開いて、だれかこちらへ駆けてくる足音がしました。二人は、おどろいて、一目散に往来をあちらへ走っていきました。二人は、うしろを見ないようにしました。なぜなら、後を追ってくる足音がきこえたからです。

「清ちゃん、追っかけてきたよ。」

「ほんとうかい。」

二人は、息を切らして、往来を走りました。前方に岡田が歩いています。岡田のそばを走りすぎるとき、清吉は、自分のかばんを投り出して、

「岡田くん、たのむよ。」といいました。

かばんを頼まれた岡田は、どうしたんだろうと思って、振り向くと、女の子が、二人の後を追ってきました。

「あんた、あの子のお友だちなの。」と、女の子が、真っ赤な顔をして、聞きました。

「なんだって、いいじゃないか。」と、岡田は女の子に、答えました。

「あの子、どこの子。」

「そんなこと知るものか。」

女の子は、また二人を追いかけました。

「足の早い女だな。」と、岡田は、見送っていました。

「孝ちゃん、また追いかけてきたよ。」

「しつこいやつだね。どこかへ曲がろうよ。」

二人は、ぐるぐると横道をまがって、紛らそうとしました。しかし、やはりだめでした。追いかけてきた女は、すぐうしろへ迫っていました。

ある大きなかしの木の下へきたとき、まず清吉がへこたれてしまいました。

「ああ、苦しい。」と、うずくまったのであります。

孝二は、追いかけてきた女の子をにらみました。まだ十五歳ぐらいで髪をお下げにして、短い服を着ていました。

「なあんだ、田舎っぺの女中か。」と、孝二は思って、生意気をいったら、なぐろうと考えました。

「おまえたち、あんないたずらをしていいか。」と、女が叫びました。

「わるかった。」と、清吉は、おとなしくあやまりました。

「ほんとうに、もうしないか、おまえもか。」と、女は、こんど孝二にいいました。

「知るもんかい。」

「こんどしたら、ひどいから。おら、田舎の学校で、徒歩競走の選手なんだぞ。」と、女の子はいいました。二人の少年は、なるほど足が速いと思って、苦笑いしました。

「おら、どう帰ったらいいかな。」と、女の子は、急にやさしくなって、聞きました。

「田舎っぺのくせに、生意気だな。」と、孝二が、いいました。

「おいでよ、道を教えてあげるから。」と、清吉は、さっきの往来まで、女の子をつれていってやりました。

「おら、奥さまにいいつかって、つかまえたんだから、わるく思わ

んでくんなせい。」と、女の子は、頭を下げて、去りました。二人の少年は、これを聞いて、なんだか涙ぐましくなりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社
　　1940（昭和15）年8月
※表題は底本では、「子供《こども》どうし」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年2月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供どうし

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/